

清国留学生部展と北京大学

渡 邊 義 浩

早稲田大学歴史館は、春季企画展として「早稲田大学清国留学生部——二〇世紀初頭の日本留学ブームと留学生事情」を二〇二三年四月二七日から六月四日まで、早稲田大学歴史館企画展示室で開催した。開催初日には、呉江浩中華人民共和国駐日本特命全權大使がご来駕されたほか、邱勇清華大学書記（理事長）、龔旗煌北京大学学長をはじめ、多くの中国の方々にご来館いただいた。

清国留学生部は、一九〇五年科挙の廃止を機に増加した中国人留学生のために、青柳篤恒や高田早苗が中心となって設立した教育部門である。大隈重信は、「支那保全論」を掲げ、清の皇族や高官と信頼関係を持っていた。清国留学生部の開設にあたっては立食会を主催し、始業式や卒業式にも臨席して、求めに応じて演説もした。教員も充実しており、日本語講師には、のちに日本を代表する中国学者となる津田左右吉も含まれていた。

教務主任兼主事に就いた青柳篤恒は、他校の速成教育を「濫教育」と批判し、清国留学生部では、普通教育の予科（二年）と専門教育の本科（二年）の三年制を採用した。専門教育に二年の修業年限を求め、本科入学の条件に予科の

修了（もしくはそれに準ずる学力）を求めたことは、他校にない特色であった。ただし、実際に高等教育に至った者は少なく、予科卒業生累計七六二名に対して、本科の卒業生は二八五名であった。

一九〇六年、清が留学生の質の低下を問題視し、速成留学生の派遣停止を定めた。そこで、清国留学生部は、一九〇七年に予科と本科を廃止し、普通科（三年）、優級師範科（三年）の六年制として、より長期的な教育課程に改めた。しかし、翌年以降、新規の学生募集を停止し、一九一〇年、普通科の第一期生四七名を送り出したことを最後に、清国留学生部は歴史的な役割を終えた。

清国留学生部に学び帰国した留学生は、教育・政治・研究など各分野で活躍した。進路が判明する一二〇名のうち約八割が教育に進んでいる。その中には、湖南省第一師範学校で毛沢東を教えた湯増壁（一九〇七年予科卒）がいる。

政治では、一九一三年の中華民国衆参議院選挙において、清国留学生部の卒業生二二名を含む八九名の早稲田大学出身の議員が選出されている。なかでも、国民党を率いて初の国会選挙に勝利したが、一九一三年に暗殺された宋教仁（一九〇六年予科卒）が知られている。宋教仁は、大総統制を唱えた孫文に対し、議院内閣制を主張した。宋が政党政治を尊重するのは、大隈重信と同じである。孫文のような暴力ではなく、民主的な法により対抗する宋の政治姿勢は、袁世凱に恐れられ、やがて暗殺された。

清国留学生部の閉部以後、早稲田大学は、本格的に大学部・専門部などで留学生を受け入れるようになった。留学生教育は、普通教育から高等専門教育へと移り変わっていく。大正期には三七一名、昭和期には一九二七〜四二年までに三八〇名の中国人留学生在が、早稲田大学を卒業している。

戦前の代表的な留学生には、中国共産党を創設した李大鈞（一九一六年大学部政治経済科中退）がいる。李大鈞は、早稲田大学大学部政治学科で、始めて社会主義思想に触れた。一九一四年には神州学会を組織し、反袁世凱活動を開



始する。一九一五年、大隈重信内閣が対華二十一条要求を出すと、留日学生名義で「全国の父老に警告す」を發表し、日本への抵抗を呼びかけた。

李大釗は、一九一七年、蔡元培総長より北京大学の経済学の教授と図書館長に任命される。早稲田大学と北京大学の密接な結びつきは、ここから始まる。一九二〇年、李大釗は、コミンテルン極東支局から訪中したヴォイチンスキーと陳独秀との会見を橋渡しして、中国共産党の結党準備を進めた。共産党結党後は、中央委員に就任し、国共合作に参加した。一九二七年、南京事件を機に蒋介石が反共に転ずると、李大釗は逮捕され、処刑された。

日中国交回復後の一九八〇年代から、中国人留学生在が早稲田大学に戻ってくる。日中の国交回復には、中日友好協会の会長を務めた廖承志（早稲田第一高等学院卒業）が活躍している。孫文の盟友であった廖仲愷の子である廖承志は、一九六三年から死去するまで、中日友好協会の会長として日中友好に努めた。一九七二年の日中国交正常化交渉では、首脳の通訳として活動し、中国共産党史上最高の知日家として、中国外交における対日専門家育成の基礎を作った。

こうした歴史を踏まえて、二〇二二年には約五、五〇〇名の中国人留学生在が、早稲田大学で学んでいる。清国留学生会は、早稲田大学と中国との長い交流の端緒となった組織であり、そのため「清国留学生会展」は、中国大使を初めとする多くの中国人の注目を集めたのである。

「清国留学生会展」を訪れて、その内容に感銘を受けた余俊北京大学校史館館長は、「清国留学生会展」で展示した早稲田大学の資料も用いて、「北京大学 早稲田大学 中日文化交流展」を北京大学校史館で開催する計画を立てた。早稲田大学歴史館は、北

京大校史館に資料を貸与し、北京大学の資料と共に、「北京大学 早稲田大学 中日文化交流展」が二〇二三年七月三〇日から開催された。

開幕式には、北京大学から龔旗煌学長・王博副学長、早稲田大学から田中愛治総長・渡邊が参加した。「北京大学 早稲田大学 中日文化交流展」は、一「京師大学堂時期的中日交流」、二「中国学生留日潮与早稲田大学」、三「中国共産主義運動的先駆―李大釗」、四「五四運動時期的中日交流」、五「改革開放以来の北京大学与早稲田大学」の五部から構成される。

一「京師大学堂（北京大学の前身）の時期の中日交流」では、大隈重信が康有為と共に保護した梁啓超が扱われ、また黄紹箕が大隈重信に宮内庁が所蔵する書籍を贈るように要請する書簡が展示された。二「中国学生の日本留学の風潮と早稲田大学」では、「清国留学生部展」の資料と共に、それを裏付ける科挙廃止の詔や早稲田に留学した後に、北京大学の教授となった朱希祖・杜国庠・馬裕藻の事績が紹介された。三「中国共産主義運動の先駆者―李大釗」では、早稲田大学に残る李大釗の学籍証のほか、李大釗の北京大学での授業を受けた学生の唯物史観についてのレポートなど珍しい資料も展示された。四「五四運動の時期の中日交流」では、早稲田に留学した後、北京大学の教授となり、雑誌『新青年』の主要な編者となった銭玄同の事績や、一九二〇年に早稲田大学の建設者同盟が北京大学を訪問した際の写真などが展示された。五「改革開放以降の北京大学と早稲田大学」では、改革開放後の北京大学と早稲田大学との交流が、写真によって振り返られた。

このように「北京大学 早稲田大学 中日文化交流展」は、北京大学と早稲田大学の長い交流の歴史を見事に整理した展示であった。早稲田大学は来年、北京大学の龔旗煌学長に名誉博士号を授与する予定である。早稲田大学歴史館は、その時期に「早稲田大学 北京大学 日中文化交流展」を開催して、外国の大学の中で、早稲田大学と最も親しい

北京大学との交流の歴史を展示していきたい。

・本稿の内容は、『早稲田大学清国留学生部―二〇世紀初頭の日本留学ブームと留学生事情』（早稲田大学歴史館、二〇一三年）、『北京大学 早稲田大学 中日文化交流展』（北京大学校史館、二〇一三年）という二冊のパンフレットに依拠している。

わたなべ・よしひろ（早稲田大学歴史館館長／早稲田大学常任理事／早稲田大学文学学術院教授）